

究極のゴルトベルク

YASUAKI SHIMIZU &
SAXOPHONETTES

©Yasuo Konishi

©Markus Jans

VÍKINGUR ÓLAFSSON

ヴィキングル・オラフソン

【第1部】

ヴィキングル・オラフソン

バッハ：ゴルトベルク変奏曲 BWV988 (全曲)

ヴィキングル・オラフソン (ピアノ)

※ 総公演時間 3時間30分予定 (第1部と第2部の間に30分休憩あり)

+

清水靖晃 & サキソフォネッツ

【第2部】

清水靖晃 & サキソフォネッツ

バッハ：ゴルトベルク変奏曲 BWV988

(清水靖晃 編曲 5サキソフォン 4コントラバス版)

清水靖晃 (テナー・サキソフォン)

サキソフォネッツ

林田祐和、田中拓也、東 涼太、鈴木広志 (サキソフォン)

佐々木大輔、中村尚子、高橋直人、出町芽生 (コントラバス)

GOLDBERG VARIATIONS

【第1部】

ヴィキングル・オラフソン

「この作品を録音することは
25年来の夢だった」

「ゴルトベルク変奏曲は壮大な“オークの木”のようであり、
壮大ではあるものの、どこか有機的で、生き生きとして
いて、活気に満ちていて、その形は敏感で再生力があり、
その葉は、形而上学的な時間を曲げる光合成によって、
崇拜する者のために音楽的な酸素を絶え間なく生み出し
ています」

——— ヴィキングル・オラフソン

- 2023年秋、ニューアルバム『J.S.バッハ：ゴルトベルク変奏曲』リリース
- 2023/24シーズンの世界ツアーでは全公演ゴルトベルク変奏曲を演奏



アイスランド出身で、現在、最も注目されているアーティストのひとりであるピアニスト、ヴィキングル・オラフソンは、最高レベルの音楽性と先見性のあるプログラムを見事に融合させ、世界中の音楽ファンに深いインパクトを与え続けている。ドイツ・グラモフォンに録音した『フィリップ・グラス：ピアノ・ワークス』(2017)、『バッハ・カレイドスコープ』(2018)、『ドビュッシー&ラモー』(2020)、『モーツァルト&コンテンポラリーズ』(2021)、『フロム・アファー』(2022)は、聴衆と評論家の想像力を捉え、6億回以上のストリーム再生を誇っている。

2023年10月にドイツ・グラモフォンより最新盤『J.S.バッハ：ゴルトベルク変奏曲』のリリースを予定。また、2023/24シーズンを通し、6大陸で同曲を演奏するゴルトベルク・ワールド・ツアーに1年を捧げる予定である。彼はこのバッハの大曲を、サウスバンク・センター(ロンドン)、カーネギーホール(ニューヨーク)、ウィーン・コンツェルトハウス、フィルハーモニー・ド・パリ、サントリーホール(東京)、トーンハレ(チューリッヒ)、ベルリン・フィルハーモニー、ブダペスト芸術宮殿、KKLルツェルン、フランクフルト歌劇場等で披露する。

ヴィキングルは、オーパス・クラシック賞「インストゥルメント・オブ・ザ・イヤー」(2023)、オーパス・クラシック賞「ソロ・レコーディング・インストゥルメント」(2回)、CoScan's International Nordic Person of the Year (2023)、ロルフ・ショック賞(2022)、グラモフォン賞「アーティスト・オブ・ザ・イヤー」(2019)、BBCミュージック・マガジン「年間最優秀アルバム賞」(2019)など世界各国で複数の賞を受賞。

彼の才能は舞台芸術のみならずテレビとラジオでいくつかの自作シリーズを発表しており、BBCラジオ4の主要な芸術番組「Front Row」で3ヶ月間アーティスト・イン・レジデンスを務め、レイキャビクのハルパ・コンサートホールからロックダウン中に生放送を行い、世界中の数百万人のリスナーに届けた。

今、もつとも聴くべきゴルトベルクを同じステージで体験！
ヴィキングル・オラフソン×清水靖晃&サキソフォネッツ

【第2部】

清水靖晃 & サキソフォネッツ

『^{スペース}バッハ×サキソフォン×空間』の
三角関係がもたらす

唯一無二、異次元のゴルトベルク体験

「僕のバッハはドイツ音楽の原理主義的、一神教的な態度じゃない。日本で生きてきて、いろんなものに興味を持ち、ジャズやラテンからロックや演歌までいろんな音楽を聴き、それらがぐしゃぐしゃになったまま巨大化したフィルターを通したバッハ。僕にはこう聴こえる、というバッハなんです。」

——— 清水靖晃 (CDリリース時(2015年)のインタビューより)



総合的な音楽制作者として様々な領域で活動を展開。これまでに40枚以上のアルバムを発表。取り分け1980年代にリリースした『案山子』や実験的ロックバンド、マライアの『うたかたの日々』が欧米の若い世代を中心に注目を集めている。

「清水靖晃 & サキソフォネッツ」は1983年にスタートしたソロ・プロジェクト。1990年代後半にJ.S.バッハ「無伴奏チェロ組曲」をテナー・サキソフォンのために編曲演奏した『チェロ・スウィーツ』は、クラシックというジャンルの垣根を越えて高い評価を獲得。ミニアルバム『バッハ・ボックス』(1997)でレコード大賞企画賞を受賞した。この試みの一環として、清水は地下採石場や美術館など特殊な意味を持つ空間に着目した録音やパフォーマンスを行っている。

2007年、清水がこだわり続けていた「五音音階から放たれる粋」を趣旨としたアルバム『ペンタトニカ』を発表。この時、林田祐和、江川良子、東京太、鈴木広志の4人を加えた新生サキソフォネッツが誕生する。2010年に東京・すみだトリフォニーホールの委嘱作品として、バッハ「ゴルトベルク変奏曲」をサキソフォン5本、コントラバス4本という斬新な編成で編曲、初演。その後も編曲に変化を加え、アルバム『ゴルトベルク・ヴァリエーションズ』(2015)に結実させる。東京オペラシティで行われた発売記念公演は満席の聴衆から絶賛を浴びる大成功を収め、翌年には録音場所の岐阜・サラマンカホールにて回帰公演も行われた。また、自作品のみならず、様々なアーティストのプロデュースや映画・テレビドラマの音楽制作も多数。近年では、NHKドラマ「透明なゆりかご」(2018)、『空白を満たしなさい』(2022)ほか。第86回アカデミー賞ノミネート作品『キューティー&ボクサー』(2013)では、シネマ・アイ・オナーズで作曲賞を受賞している。